

# ベトナムにおける儒教の研究状況

—「孝」の思想を中心に—

佐藤トウイウエン

The Research Situation of Confucianism in Vietnam

—Focus on “filial piety” thought—

SATO Thuy Uyen

## Abstract

“A Bibliography on Confucianism in Vietnam” (*Thư mục Nho giáo Việt nam*) was compiled by the American HARVARD-YENCHING Institute and Hanoi Han Nom Research Institute. It was published in 2007 by Khoa hoc Xa hoi publisher. This book has summarized the materials and research paper about Confucianism in Vietnam from 1470 up to 2007. It can be said that at present in Vietnam, among the books that summarizes articles on researching Confucianism, “A Bibliography on Confucianism in Vietnam” is one of the largest scale. Throughout this book, we can see clearly not only the research situation of Confucianism, the thought of “filial piety” in Vietnam but also the obvious nature and characteristics of Confucianism in Vietnam of each period and how an interest in “filial piety” of Vietnamese researchers is. So, we have considered 1662 materials in this book in order to have a general view about the process historical development of Confucianism, the reception and the change of Confucianism in Vietnam, a tendency to research Confucianism, especially the research situation of “filial piety” of each period in Vietnam.

**Key Words:** Confucianism in Vietnam, “Filial piety” thought, A Bibliography on Confucianism in Vietnam, Nho giáo Việt Nam, Tư tưởng hiếu, Thư mục Nho giáo Việt nam

## はじめに

ファン・ダイ・ゾアン (Phan Đại Doãn) 氏は、ベトナムの儒教について「ベトナムでは儒教は北属期<sup>1)</sup>に伝わったが、李朝と陳朝から儒教は次第に社会に幅広く影響をもたらした。しかし、その時期には実際に為政者、朝廷の官吏などの階級にしか浸透しなかった<sup>2)</sup>」と述べている。実際に儒教の位置が政府当局により確定したのは、李朝の時代、神武二年(1070、宋熙寧三年)のことであり、『大越史記全書』(以下、『全書』と省略)に、「庚戌神武二年宋熙寧三年秋八月、修文廟、塑孔子周公及四配像、畫七十二賢像、四時享祀<sup>3)</sup>」とある。これ以降、各王朝は国家有用の人材を育成するために儒教思想を国家教学の標準に置いた。

儒教はベトナムに受容された後、中国の儒教の原型を必ずしも維持せず、「ベトナム化」され、地域的特色を与えられた。換言すれば、ベトナムの儒家には道德倫理、特に「孝」や「儀礼」、孔子、孟子、程顥、程頤、朱熹の思想が重視されたが、王守仁や陸九淵の「心学」についてはほとんど論及されなかった。しかし、程顥や程頤の思想に対しても、ベトナムの儒家は「理」と「気」、「心」と「性」、「体」と「用」などの範疇をさほど考慮せず、「道」と「徳」、「礼」と「法」、「君子」と「小人」、「治」と「乱」に焦点が当てられてきた。ベトナムの儒家は、孔子、孟子、程朱の思想を実用化、簡略化したため、「儒学」よりも「儒教」を重視していた<sup>4)</sup>。ベトナムの儒家は、中国哲学の研究の成果を実際に応用することを中心にしたため、「儒学」がほとんどなく、「儒教」の応用しか見られないとされる<sup>5)</sup>。

いずれにしても、儒教は中国からベトナムに伝来した後、受容と変遷を遂げつつ、ベトナムの社会に深い影響を与えていたといえよう。ベトナムにおける儒教の研究は、多種多彩な分野が存在し、次第に研究者の関心が高まっている。ファン・ダイ・ゾアン氏は、ベトナムにおける儒教の研究状況について「一般的には各研究者、科学者たちはベトナムにおける儒教の積極的な影響や消極的な制限について分析することを焦点に当てている。90年代、「儒学」、「儒教」の研究状況は前世紀(筆者注：19世紀)社会に対して儒教の無力さや儒教の系統を中心に研究

1) Trần Trọng Kim, *Việt Nam sử lược* 『ベトナム史略』(Bộ giáo dục trung tâm học liệu 出版社、1971年)によれば、北属期はベトナムが中国歴代王朝に支配された時期であり、第一北属期(BC 111年~39年)、第二北属期(43年~544年)、第三北属期(603年~939)の三つの時期に分けられる。ここにいう北属期は第二・第三北属期をいう。

2) Phan Đại Doãn, *Một số vấn đề nho giáo Việt Nam* 『ベトナム儒教のいくつかの問題点』(Chính trị quốc gia Hà Nội 出版社、1998年)、9頁。

3) 陳荆和『大越史記全書』校合本、本記全書卷之三(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、1984年)、245頁。

4) Phan Đại Doãn, *Một số vấn đề nho giáo Việt Nam* 『ベトナム儒教のいくつかの問題点』(Chính trị quốc gia Hà Nội 出版社、1998年)、9~10頁。

5) ビン・ズオン大学の Nguyễn Khắc Thuận 先生に指摘していただいた。

したが、実際にはベトナムの研究者はベトナムにおける儒教の歴史的発展や、ベトナムの儒教の特徴と中国の儒教との共通点、相違点などを集中的に研究していなかったと思う<sup>6)</sup>と述べた。

ベトナムにおける儒教が、各時期、各段階にどのように展開したのか、どのような方向へ進んだのかを総括すれば、ベトナムの儒教の歴史的発展、受容、変遷の過程がはっきりと見えてくるであろう。こうした問題を解明することは大切な作業であるが、しかし、現在までこの分野には詳細な統計的研究はまだないようである。本稿では *Thư mục Nho giáo Việt Nam* (『越南儒教書目』) にもとづき、ベトナムにおける儒教の研究状況、とりわけ「孝」の思想を中心に考察しつつ、各時期のベトナムの儒教の特徴や性質、ベトナムの研究者が「孝」についてどのような関心を持ったのかを明らかにしたい。

### 一 *Thư mục Nho giáo Việt Nam* (『越南儒教書目』) について

*Thư mục Nho giáo Việt Nam* (『越南儒教書目』) (以下、『書目』と略称) はハノイ漢喃研究院とアメリカの HARVARD-YENCHING 研究所により編纂され、2007年に Khoa học Xã hội 出版社から出版された<sup>7)</sup>。目次、序文、前書き、書目、参照表を含む全778頁で、2005点の資料が紹介されている。内訳は、漢字・字喃資料(書籍および碑文)が409点、ベトナム語資料が1342点、中国語資料が91点、英語およびフランス語資料が163点である。全2005点の資料のうち、177点の資料は出版年不明であるが、そのうち内容によって阮朝以前、あるいは阮朝以降に刊行されたのかを判断できるものが59点ある。英語、フランス語、中国語のうち225点の資料は外国で刊行されている。現在のベトナムにおいて、儒教の研究に関する記事をまとめた書物の中では、『書目』が最大の規模のものであるといえる。

『書目』には、1470年から2007年までの資料が記されており、1470年以前の資料は載せていないが、その理由は、同書序文によると「陳朝、胡朝から儒教の関連文献があったが、これらの文献は現在、所蔵がない。黎朝、西山朝、阮朝には漢字・字喃の書籍、資料が多く誕生したが、現存する儒教の精神および儒教に関する内容をもつ最も古い資料は、黎朝のレー・バン・フウ(Lê Văn Hưu)、ファン・フ・テイエン(Phan Phu Tiên)、ゴ・シイ・リエン(Ngô Sĩ Liên)らの『大越史記全書』(1479)から見出すことができる<sup>8)</sup>という。

『書目』に紹介されている全2005点のうち外国に出版している資料および出版年不明の資料を除くと、1662点となる。この1662点の資料の中には近代における論文・論評の類も含まれてい

6) Phan Đại Doãn, *Một số vấn đề nho giáo Việt Nam* 『ベトナム儒教のいくつかの問題点』(Chính trị quốc gia Hà Nội 出版社、1998年)、11頁。

7) Viện nghiên cứu Hán Nôm, viện Harvard-Yenching (America)、*Thư mục Nho giáo Việt Nam* (『越南儒教書目』、Khoa học Xã hội 出版社、2007年)。

8) *Thư mục Nho giáo Việt Nam* (『越南儒教書目』)、I～II頁。

る。それらは63種類の学術誌・新聞などに引用されている論文、単行本、漢字・字喃の書籍、碑文、国際学会の発表論集、修士および博士論文、マイクロフィルム、といったものである。この7種の資料の内訳は表1のとおりである。

表1 『書目』所載の資料の種類の内訳

	資料の種類	件数
① 学術誌および新聞	1. Tạp chí triết học (『哲学雑誌』)	160
	2. Minh Tân (『ミン・タン』)	71
	3. Tạp chí Hán Nôm (『漢喃雑誌』)	61
	4. Nghiên cứu lịch sử (『歴史研究』)	50
	5. Tạp chí Xưa và Nay (『昔と現在雑誌』)	43
	6. Văn hóa nguyệt san (『文化月刊』)	33
	7. Văn hóa nghệ thuật (『文化芸術』)	32
	8. Tạp chí Nam Phong (『ナム・フォン雑誌』)	31
	9. Văn hóa Á Châu (『亜州文化』)	23
	10. Tạp chí Phương Đông (『東方雑誌』)	17
	11. Nghiên cứu lý luận (『理論研究』)	11
	12. Đại Việt tạp chí (『大越雑誌』)	11
	13. Thông tin khoa học xã hội (『社会科学通信』)	10
	14. Phụ nữ tân văn (『婦女新聞』)	8
	15. Nghiên cứu Trung Quốc (『中国研究』)	8
	16. Bách khoa (『百科』)	8
	17. Tạp chí Tri Tân (『知新雑誌』)	7
	18. Sinh lực (『シン・ルック』)	6
	19. Nghiên cứu tôn giáo (『宗教研究』)	6
	20. Luận Đàm (『論談』)	5
	21. Tạp chí nghiên cứu văn sử địa (『文学・歴史・地理研究雑誌』)	5
	22. Thông tin lý luận (『理論通信』)	5
	23. Văn Đàn (『文壇』)	5
	24. Tạp chí văn học (『文学雑誌』)	4
	25. Minh Đức (『ミン・ドック』)	4
	26. Văn hóa dân gian (『民間文化』)	4
	27. Tạp chí nhà nước và pháp luật (『国家と法律雑誌』)	3
	28. Thanh Nghị (『タン・ギー』)	3
	29. Tạp chí Cộng sản (『共産雑誌』)	3
	30. Giáo dục lý luận (『理論教育』)	3
	31. Nghiên cứu nghệ thuật (『芸術研究』)	3
	32. Tạp chí nghiên cứu Nhật Bản và Đông Bắc Á (『日本と東北亜研究雑誌』)	3
	33. Nghiên cứu Nhật Bản (『日本研究』)	2
	34. Tạp chí Đại học (『大学雑誌』)	2
	35. Tạp chí nghị luận văn chương khảo cứu (『文章考察議論雑誌』)	2
	36. Phổ thông (『普及』)	2

37. Văn học nghệ thuật (『文学・芸術』)	2
38. Trung Bắc tân văn (『中北新聞』)	2
39. Đặc san trường Đại học văn khoa (『バン・クア大学の特別号』)	2
40. Đại học Huế (『フエ大学の雑誌』)	2
41. Tao Đàn (『タオ・ダン』)	2
42. Tạp chí đại học và giáo dục chuyên nghiệp (『大学および専攻教育の雑誌』)	2
43. Nghiên cứu Đông Nam Á (『東南亜研究』)	2
44. Tia sáng (『テイエア・サン』)	2
45. Báo Gió mới (『ジョーモイ新聞』)	1
46. Việt Nam Đông Nam Á ngày nay (『現在の東南亜・ベトナム』)	1
47. Đông Phương (『東方』)	1
48. Việt báo (『ヴィエット新聞』)	1
49. Lý luận chính trị (『政治理論』)	1
50. Tạp chí khoa học xã hội (『社会科学雑誌』)	1
51. Tâm lý học (『心理学』)	1
52. Tạp chí khoa học chính trị (『政治科学雑誌』)	1
53. Nghiên cứu Đông Bắc Á (『東北亜研究』)	1
54. Trung Bắc chủ nhật (『中北日曜日』)	1
55. Dân chủ và pháp luật (『民主と法律』)	1
56. Nghiên cứu văn học (『文学研究』)	1
57. Đông Thành (『ドン・タイン』)	1
58. Nghiên cứu con người (『人間研究』)	1
59. Dân tộc học (『民俗学』)	1
60. Dân tộc và thời đại (『民族と時代』)	1
61. Nghiên cứu giáo dục (『教育研究』)	1
62. Nghiên cứu Phật học (『仏学研究』)	1
63. Báo Tiền phong (『テイエン・フォン新聞』)	1
合 計	689
② 単行本	601
③ 漢字・字喃の書籍	188
④ 碑文	103
⑤ 国際学会などの 発表論集	61
⑥ 修士、博士論文	17
⑦ マイクロフィルム	3
合 計	1662

表1から、儒教研究の資料が最も多く掲載されている学術誌は *Tạp chí Triết học* (『哲学雑誌』) であり、次いで *Minh Tân* (『ミン・タン』)、*Tạp chí Hán Nôm* (『漢喃雑誌』)、*Tạp chí nghiên cứu lịch sử* (『歴史研究雑誌』)、*Tạp chí Xưa và Nay* (『昔と現在雑誌』) などが挙げられる。これらの点から、現在、ベトナムでは「儒教」が「宗教」の範疇ではなく、「哲学」の範疇に入れられて

研究されていることもわかる。

そして、63種類の雑誌のうち、*Tap chí triết học* (『哲学雑誌』)、*Tap chí Hán Nôm* (『漢喃雑誌』)、*Nghiên cứu lịch sử* (『歴史研究』)、*Tap chí Xưa và Nay* (『昔と現在雑誌』)、*Văn hóa nghệ thuật* (『文化芸術』)、*Thông tin khoa học xã hội* (『社会科学通信』)、*Nghiên cứu Trung Quốc* (『中国研究』)、*Nghiên cứu tôn giáo* (『宗教研究』)、*Tap chí nghiên cứu văn sử địa* (『文学・歴史・地理研究雑誌』)、*Văn hóa dân gian* (『民間文化』)、*Tap chí nhà nước và pháp luật* (『国家と法律雑誌』)、*Tap chí Cộng sản* (『共産雑誌』)、*Giáo dục lý luận* (『理論教育』)、*Tap chí nghiên cứu Nhật Bản và Đông Bắc Á* (『日本と東北亜研究雑誌』)、*Nghiên cứu Nhật Bản* (『日本研究』)、*Văn học nghệ thuật* (『文学・芸術』)、*Nghiên cứu Đông Nam Á* (『東南亜研究』)、*Tia sáng* (『テイア・サン』)、*Lý luận chính trị* (『政治理論』)、*Tap chí khoa học xã hội* (『社会科学雑誌』)、*Tâm lý học* (『心理学』)、*Tap chí khoa học chính trị* (『政治科学雑誌』)、*Nghiên cứu Đông Bắc Á* (『東北亜研究』)、*Dân chủ và pháp luật* (『民主と法律』)、*Nghiên cứu văn học* (『文学研究』)、*Nghiên cứu con người* (『人間研究』)、*Dân tộc học* (『民俗学』)、*Dân tộc và thời đại* (『民族と時代』)、*Nghiên cứu Phật học* (『仏学研究』)、*Báo Tiền phong* (『テイエン・フォン新聞』)の30種類の研究雑誌は現在においても定期的に出版されている。

表1に記されている具体的な内容については、さらに以下の表2、3、4のようになる。

## 二 ベトナムにおける儒教の研究状況

さて、以下、ベトナムにおける儒教関連資料を、1. 後黎朝の洪徳時代(1470-1497)から西山朝(1788-1802)まで、2. 阮朝(1802-1945)、3. 1946年以降から現在(2007)までの三期に分けて考察したい。

### 1. 後黎朝の洪徳時代から西山朝まで

#### A. 儒教関連資料の状況

引用される1662点の資料のうち、後黎朝の洪徳時代から西山朝までの資料が134点ある。具体的には表2を参照されたい。

表2 後黎朝の洪徳時代から西山朝までの儒教関連資料

	資料の内容	件数
1	進士題名記、碑記(光順四年(1463)癸未科から景興40年(1779)己亥科まで)	84
2	科挙(進士に合格した名簿、文選、文策、受験問題点、伝記など)	19
3	聖賢、孔子の道を称賛する碑文	7
4	字喃により儒教經典の翻案あるいは解釈、評論	5
5	史記	5

6	文学	3
7	典例、刑律	3
8	家礼	2
9	三教	1
10	家訓	1
11	郷約	1
12	教科書（漢字学習のもの）	1
13	風土、地理	1
14	宗教信仰	1
	合計	134

この集計の結果によると、後黎朝の洪徳時代から西山朝まで、すなわち15世紀から19世紀初めまでのベトナムにおける儒教研究の状況は、儒教の道、儒教の思想を称賛しつつ、科挙や儒教の学習によって立身出世ができることを提唱する傾向があったことが見て取れる。そして、『書目』から見る限り、儒教経典を注解、解釈しながら、字喃に翻案する活動が18世紀頃から始まったこともわかる。しかし、実際にはその開始時期はもっと早く、『全書』によると、陳朝の順宗帝乙亥八年（明洪武二十八年、1395）に胡季犛が『書経』の「無逸篇」を国語（字喃）に訳したことが「夏、四月、詔季犛入居省臺之右、名曰畫廬、季犛因編無逸篇、譯為國語、以教官家」<sup>9)</sup>と記されている。その後『詩経』がベトナム語の散文に改められ、黎朝永盛10年（1714）に『詩経解音』という書名で木活字によって刊行され、光中5年（1792）に崇正院で再刊された。そして、明命16年（1835）には李文馥の「二十四孝演歌」、明命17年（1836）には、「詩経大全節要演義」、『書経大全節要演義』、『易経大全節要演義』、『五経節要演義』が次々に字喃に演義されたのである。この他、『中庸演歌』が成泰3年（1891）に、嗣徳帝が孔子の『論語』20篇を『論語釋義』に字喃で書き直し、成泰8年（1896）に出版され、成泰年（1889-1907）に綿寓皇子の『孝経國音演義歌』が、啓定3年（1918）に『孝経譯義』が刊行された<sup>10)</sup>。つまり、儒教の経典を字喃で説明するようになったのは陳朝であったが、この活動はまだ普及にならず、18世紀からさらに盛んになったといえる。ファン・ダイ・ゾアン氏は「18世紀には儒教の経典を字喃に翻案する活動が盛んになった。それはベトナムの「経学」の傾向を表現し、「越儒」の誕生に貢献した」<sup>11)</sup>と述べている。

なお、以上の資料のうち碑文が約63%を占めていることも注意すべきである。

9) 陳荊和『大越史記全書』校合本、本記全書卷之八（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、1984年）、470頁。

10) Nguyễn Quang Hồng, *Khái luận văn tự học chữ Nôm* 『字喃文字学概論』（Giáo dục 出版社、2008年）、408～409頁。

11) Phan Đại Doãn, *Một số vấn đề nho giáo Việt Nam* 『ベトナム儒教のいくつかの問題点』（Chính trị quốc gia Hà Nội 出版社、1998年）、77、78頁。

## イ. 「孝」の思想の研究状況

後黎朝の洪徳時代（1470-1497）から西山朝（1788-1802）まで、『書目』を見る限り、ベトナムでは「孝」思想に特化した著作はなかったようである。

## 2. 阮朝（1802-1945）

### ア. 儒教関連資料の状況

阮朝時期（1802-1945）の資料は269点ある。このうち、「孝」に関する書籍は7点である（後述）。具体的には表3を参照されたい。

表3 阮朝（1802-1945）の儒教関連資料の内容

	資料の内容	件数
1	科挙（進士合格者の名簿、文選、文策、試験問題、伝記など）	48
2	字喃により儒教經典の翻案あるいは解釈	40
3	中国の名臣、有名な儒者	28
4	三教（儒教—仏教—道教）	23
5	儒教の倫理と道德（五常、孔子の教え）	17
6	文学、文化、言語	17
7	教科書（漢字学習のもの）	15
8	家訓と家庭教育	13
9	聖賢、孔子の道を称賛する碑文	11
10	典例、刑律	10
11	中国、ベトナムの儒教および儒学の役割、特徴	9
12	歴史	8
13	「孝」に関する書籍	7
14	西洋と儒教	4
15	哲学と思想	4
16	ベトナムの名士、有名な儒者	3
17	儒教の影響とベトナム	3
18	進士題名記、碑記	2
19	勅諭など	2
20	風水	1
21	儒教とキリスト教	1
22	家譜	1
23	家札	1
24	道教の經典	1
	合計	269

これによると、阮朝、すなわち19世紀から20世紀の半ばまでのベトナムにおける儒教関連資料は、科挙に関するもの、字喃によって儒教經典を翻案、解釈したもの、あるいは中国の名士、

有名な儒者の経歴および彼らの儒教思想などが論じられている。科挙に関する48件の資料では、進士合格者の名簿および文選、文策、試験問題などに関する資料が多い。字喃による儒教經典の翻案、あるいは解釈に関する40件の資料のうちでは、『四書』、『五経』に関する研究が最も多い。中国の名士、名儒の経歴、著作、および彼らの儒教思想に関しては、孔子に関するものが最も多く、次に孟子、王陽明、墨子、儒家の代表的な人物が中心にとり上げられている。さらに、「三教」についての研究が阮朝時代に急に増えている。また、この期の資料は漢字・字喃・国語字（現代ベトナム語）という三種類の文字が使われるが、漢字・字喃のものがほとんどを占めている。さらに、ベトナムがフランスの植民地になったため、この期、フランスに関するいくつかの研究が現れてきた。ベトナムの名儒の著作に関しては、いくつかの価値のある著作も現れた。ファン・ダイ・ゾアン氏により、「阮朝国史館が編纂されている『大南寔録』、『欽定越史通鑑綱目』などの代表的な歴史考証の資料も『登科録』などの科挙考証の資料も作成された。18世紀には歴史考証や、儒教の「考証学」の発展があり、ベトナムの「実学」の大きな成果であったといえよう。しかし、ベトナムでの「考証学」は書籍の不足のため一定の制限があった。ゴ・テイ・シイ (Ngô Thi Sĩ) は『越史標案』で「何も考証できない」といっている。さらに、レー・クイ・ドン (Lê Quý Đôn) は『黎朝通史』で「現在 (18世紀半ば) 書籍をまとめると、約100件のみ所蔵され、中国の10分の1も占めることがない」という<sup>12)</sup>と述べた。そのため、ベトナムの「考証学」は中国の「考証学」と比べると、かなり制限があるといえる。

ともあれ、ベトナムでの「経学」、「考証学」の活動が19世紀に発展したこと、フランスの影響を受けていると思われること、阮朝から「三教同源」という主張が増加していることがわかる。

## イ. 「孝」の思想の研究状態

上述したように、この時期、「孝」に関する著書は7点ある。各資料の内容は具体的に以下のとおりである。

### 1. 『陽節演義』(刊本、ハノイ漢喃研究院蔵)

同文堂で1886年に刊行された。本書は、李文馥が中国の有名な24人の孝子の説話を引用しつつ字喃に翻案した「二十四孝演歌」を収めている。このほか儒家の基礎的な道德教育の文献である『明道家訓』を収めている。

### 2. 『孝経注解』(刊本、ハノイ漢喃研究院蔵)

道光27年(1847)に刊行された。『孝経』を注釈、解説したものである。

---

12) Phan Đại Doãn, *Một số vấn đề nho giáo Việt Nam* 『ベトナム儒教のいくつかの問題点』(Chính trị quốc gia Hà Nội 出版社、1998年)、73~78頁。

## 3. 『孝経訳説闡義』（刊本、ハノイ漢喃研究院蔵）

ハノイで1907年に刊行された。『孝経』を注釈しつつ、評論したものである。

## 4. 『孝経立本』（刊本、ハノイ漢喃研究院蔵）

出版年不明。阮朝の綿窩皇子によって著わされ、雅堂で刊行された。『孝経』を説明、評論したものである。

## 5. 『孝経国音演歌』（刊本、ハノイ漢喃研究院蔵）

出版年不明。阮朝の綿窩皇子によって著わされ、雅堂で刊行された。『孝経』を字喃により翻案したものである。

## 6. 『孝順約語』（写本、ハノイ漢喃研究院蔵）

出版年不明。杜發が編纂された386句からなっており、昔の孝行説話を語り、典籍を引用する。その他、李文馥の「二十四孝詠」などを収めている。

## 7. 『勸孝書』（刊本、ハノイ漢喃研究院蔵）

李文馥が編纂され、1870年に刊行された。字喃に翻案した「二十四孝」、「勸孝書」、「勸孝善」を収めている。

これによると、阮朝の「孝」思想の研究は主に『孝経』を注釈し、「二十四孝」を字喃により翻案したものであることがわかる。ファン・ダイ・ゾアン氏の論文「儒教の影響の下のベトナムの伝統的な家庭」によると、

天下を統治するため「孝」を道具として使用したのは儒教の影響下にあるほとんどの封建朝廷、特に阮朝の文化・政治路線であった。教科書とされた『四書』、『五経』以外に、黎・阮朝はまた『孝経』の導入を強調した。阮朝は「二十四孝演歌」を印刷させ、全国に公布し、絵を入れて各地で販売した<sup>13)</sup>。

阮朝は『孝経』、「二十四孝」などの「孝」に関する書籍を字喃に翻案することが最も盛んであった時期といえよう。阮朝時代から科挙に関する資料以外に、「孝道」の教育を提唱し始めることがはっきりとわかるのである。これは、『孝経』、「二十四孝」が阮朝時代に「ベトナム化」したことを意味するであろう。

13) Phan Đại Doãn 編, *Một số vấn đề nho giáo Việt Nam* 『ベトナム儒教のいくつかの問題点』（Chính trị quốc gia Hà Nội 出版社、1998年）、140頁。

### 3. 1946年以降から現在（2007）まで

#### ア. 儒教関連資料の状況

1946年以降から現在（2007年）までの資料は1259点ある。このうち、「孝」に関する資料はそのうち14点である（後述）。具体的には表4を参照されたい。

表4 1946年以降から現在（2007）の儒教関連資料の内容

	資料の内容	件数
1	ベトナムの名士、有名な儒者	183
2	国語字により儒教經典の翻案あるいは解釈、評論	173
3	儒教の影響とベトナム	171
4	文学、文化、言語	144
5	中国、ベトナムの儒教および儒学の役割、特徴	113
6	哲学と思想	98
7	中国の名士、有名な儒者、諸子百家	92
8	三教（儒教一仏教一道教）	43
9	儒教の倫理と道徳	42
10	科挙（進士に合格した名簿、文選、文策、受験問題点、伝記など）	28
11	風土、地理	26
12	歴史	25
13	碑文の紹介	22
14	他の国の儒教	21
15	宗教信仰	19
16	家訓と家庭教育	14
17	「孝」と孝教育	14
18	教科書（漢字学習のもの）	10
19	医学	6
20	典例、刑律	5
21	郷約	3
22	聖賢、孔子の道を称賛する碑文	2
23	儒教とキリスト教	2
24	家譜	2
25	勅諭など	1
	合計	1259

これによると、1946年以降から現在（2007年）まで、すなわち20世紀半ばから21世紀初めまでのベトナムにおける儒教関連資料は、ベトナムの名士、名儒の経歴、著作、および彼らの儒教の思想を記したもの、あるいは字喃によって儒教經典を翻案、解釈、評論したもの、ベトナムの社会・文化に対する儒教の幅広く深い影響などが論じられている。ベトナムの儒教思想に関しては、有名な儒者であるグエン・チャイ（Nguyễn Trãi）、グエン・ビン・キエム（Nguyễn

Binh Khiêm)、レー・クイ・ドン (Lê Quý Đôn)、ゴ・テイ・ニャム (Ngô Thi Nhậm)、ファン・ボイ・チャウ (Phan Bội Châu) らについての論及が多い。国語字 (現代ベトナム語) による儒教經典の翻案、あるいは解釈、評論に関する173件の資料のうちでは、『易経』、『論語』に関する研究が最も多い。そして、ベトナムの社会・文化に対する儒教の影響については言語、文化芸術、教育、思想、歴史、習慣、民間信仰、観念、政策、科挙試験などのすべての分野で言及がなされている。中国の名士、名儒、諸子百家についての資料は、孔子に関するものが最も多く、次は孟子、朱熹、王陽明、老子、莊子、墨子、韓非など、儒家、道家、墨家、法家の代表的な人物を中心に考察されている。

これによって、20世紀半ばおよび21世紀の初めごろから、ベトナム人の研究者はベトナムの儒学につき依然として強い興味を抱いていたことが知られる。また、彼らはベトナムにおける儒教の影響を通して中越の文化交渉、および受容・変遷の過程、さらには日本、シンガポールなどの隣国の儒教の状況、および東洋思想と西洋思想の相違点を深く考察する傾向にあったこともわかる。もちろん、上述したように「90年代、ベトナムの研究者はベトナムにおける儒教の歴史的発展やベトナムの儒教の特徴と中国の儒教との共通点、相違点などを集中的に研究していなかった」というファン・ダイ・ゾアン氏の意見もある。

こうしてみると、ベトナムにおける儒教研究の状況は各時代、各段階によって異なっていたことが見えてくる。現在のベトナムにおける儒教研究の一つの傾向は、文化交渉、グローバル視点から実施されている点にあるといえる。なお、1946年から現在 (2007年) までの資料は現代ベトナム語および英語、フランス語のものがほとんどである。

## イ. 「孝」の思想の研究状態

上述したように、この時期、「孝」に関する著書、および研究テーマは14点ある。各資料の内容は具体的に以下のとおりである。

1. *Bàn về chữ hiếu của dân tộc Việt Nam* (「ベトナム民族の「孝」という字について」) (*Xưa và Nay* 『昔と現在』 第248号、2005年)  
ベトナム人、ベトナム文化に対する儒教の影響、特にベトナム人の「孝道」について論じている。
2. *Hiếu Kinh* (『孝経』) (Đông Nai 出版社、1999年)  
『孝経』の原文を引用しつつ現代ベトナム語に訳した書物である。
3. *Khảo luận: Vấn đề luân lý gia đình* (「家庭倫理の問題の考察」) (*Minh Tân* 『ミン・タン』 第12号、1964年)

家庭道徳、倫理、特に、父母、夫婦、親子、兄弟の関係に対する「孝悌」を論じている。

4. *Khổng Tử cùng học trò đối thoại về giáo dục* (『孔子と門人の教育について対話』) (Hà Nội 出版社、2006年)

孔子の「教育」、「道徳の養育」、「孝行」という教えを通して、中国の古代の教育を紹介している。

5. *Nhị thập tứ hiếu* (『二十四孝』) (Tân Việt 出版社、1952年)

李文馥の「二十四孝演歌」を「双七六八体」の詩体により現代ベトナム語に訳した書物である。

6. *Nhị thập tứ hiếu* (『二十四孝』) (Văn Nghệ 出版社、1999年)

李文馥の「二十四孝演歌」を「双七六八体」の詩体により現代ベトナム語に訳した書物である。

7. *Những tấm gương hiếu thảo thời xưa* (『昔の孝行の鑑』) (Văn hóa dân tộc 出版社、2000年)

昔の孝行説話を紹介しつつ、「孝道」の観念につき考察した書物である。

8. *Nói về bốn chữ “Trung, Hiếu, Lễ, Nghĩa” của phái Khổng học* (「孔子学派の「忠」、「孝」、「礼」、「義」について」) (*Minh Tân* 『ミン・タン』 第23号、1965年)

「忠」、「孝」、「礼」、「儀」という儒教の基礎的な道徳範疇を高く評価している。

9. *Phạm trù trung - hiếu trong triết lý phương Đông và tư tưởng Hồ Chí Minh với vấn đề giáo dục đạo đức cách mạng hiện nay* (東方哲理における「忠」、「孝」の範疇と現在の革命道徳についてのホーチミン思想) (*Tạp chí triết học* 『哲学雑誌』 第1号、2002年)

儒教の道徳の「忠」、「孝」の概念が、ホー・チ・ミン (Hồ Chí Minh) の思想に影響を与えていたことを論じる。さらに、この二つの概念の維持・発展は、現在の革命道徳の教育にどのような役割、および意義を持っているのかを検討している。

- 10 & 11. *Thử bàn về đạo hiếu của Nho gia* (「儒家の道徳の「孝道」を考察する」) (*Tạp chí Hán Nôm* 『漢喃雑誌』 第2号、2003年)

『孝経』、『論語』、『孟子』、『礼記』、『中庸』を引用しつつ、儒教の思想の「孝」の本質を分析している。

12. *Việt Nam tinh hoa đạo đức* (『ベトナム— 道德の精華』) (Hà Nội 出版社、2002年)

ことわざ、歌謡、「二十四孝」などの「人間の道」に関する民間の物語や中国の故事を通して、かつてのベトナムの家庭の習慣、礼儀を論じている。

13. *Hiếu Kinh lập bản — Vietnamese Interpretation of the Classic of Filial Piety* (「国際学会の発表論集」、2006年)

『孝経立本』を通して、中国人の「孝」の理解をベトナム人のそれと比較している。

14. *Supporting Parents in Uncertainty: Filial Piety in the Rural Mekong Delta* (The 3rd International Conference Proceedings, Vietnam National University Hochiminh city, 2002年)

メコンデルタの地域での親子関係を考察しつつ、ドイモイ時代における現代ベトナム社会の「孝」の役割を考察している。

以上に見てきたとおり、1946年から2007年まで、ベトナムにおける「孝」思想の研究は主に現代ベトナム語により『孝経』の注解・解釈したもの、および『孝経』、『孟子』、『論語』、「二十四孝」説話を引用しつつ、家庭教育、家庭道德、儒教の「孝道」を評論するといった点に焦点が当てられている。これらの研究を通して、「孝」はベトナム人の基層的な道德であり、ベトナムの「孝」は父母だけではなく祖父母、祖先にも広がっていること、家風、家礼、家庭教育を維持発揮させるのに繋がることなどが指摘されている。いわば、ベトナムの「孝」は「儀」を離れず、「儀」は「孝」の条件となっているのである。故チャン・デイン・フウ (Trần Đình Hượu) 教授はベトナム人の「孝」思想が「儀」と密接関係があるという思想を初めて言及した人である<sup>14)</sup>。「養親」、「奉親」、「敬親」という「孝」の心情が「祖先礼拝」、「祖先追慕」、「祖先祭礼」といった「礼」の実践へと展開していることになる。

しかし、「二十四孝」説話の文献学的調査や詳細な分析は『書目』ではほとんど紹介されていない。現在、筆者は「二十四孝」説話をとりあげ、その流布状況、その受容・変遷の状況、そして中越の文化交渉、ベトナム人の「孝」思想を解明しようとしているが、それは本稿の研究範囲ではないため、稿を改めて論じたいと思う。

## おわりに

ベトナムにおける儒教関係文献は、阮朝以前においては、進士題名記、碑文、科挙についてのテーマが圧倒的に多いといえる。しかし、阮朝時期には『四書』、『五経』の儒教の經典の注

14) Phan Đại Doãn, *Một số vấn đề nho giáo Việt Nam* 『ベトナム儒教のいくつかの問題点』 (Chính trị quốc gia Hà Nội 出版社、1998年)、95、96頁。

釈と演義が現われ、さらに儒家、墨家の代表的な人物を中心に考察されていること、三教和同という主張のもとで「三教」（儒教・仏教・道教）に関するテーマが多くなることが指摘できる。ファン・ダイ・ゾアン氏は「字喃により儒教の経典を翻案する活動を通して、ベトナム化する「経学」の傾向があったということになろう。この活動はベトナムの「儒学」の重要な成果といえる。「経学」の発展は「儒教」を振興する仕方の一つである<sup>15)</sup>と述べている。また、この時期の重要な特色として、『孝経』や二十四孝説話が「ベトナム化」したことも挙げることができる。とりわけ筆者が現在研究対象としている二十四孝説話はベトナムの孝思想実践を考える上で、きわめて重要なものと思われる。

一方、阮朝時代と比べると、1946年から現在までは、ベトナム社会・文化に対する儒教の影響、哲学と思想、あるいは『四書』、『五経』、『論語』、『易経』、さらに「風水」、「理数」、「地理」の応用性、哲学性をよく評論し、さらに中国の儒家、墨家以外にも、諸子百家、道家、法家の代表的な人物たちも広げて紹介するなど、さまざまなテーマがある。レ・クイ・ドン（Lê Quý Đôn）、ゴ・テイ・ニャム（Ngô Thi Nhâm）、ファン・ボイ・チャウ（Phan Bội Châu）などのベトナムの儒家の思想、著作を研究することを通して、ベトナムの儒家たちは18世紀から19世紀初めころまで、「哲学本体論」、「理」、「気」の範疇に興味を持ち、特に、レ・クイ・ドン（Lê Quý Đôn）やゴ・テイ・ニャム（Ngô Thi Nhâm）の著作には「理」、「気」に関する評論もある。また、最近の傾向としては、日本、朝鮮、韓国などの漢字文化圏の国々の儒教についての研究、西洋思想と東洋思想の比較、フランスと中国とベトナムとの文化交渉を研究する傾向が顕著に現われてきたことがある。すなわち、「文化交渉」、「異文化比較」、「東洋思想と西洋思想の相違点」などの視点から、儒教をとり上げるようになってきている。

また、ファン・ダイ・ゾアン氏が言った通り、ベトナムの儒教研究は基本的に宋儒、つまり程朱の思想が注目され、「心学」思想についての研究はほとんどないように見える。

阮朝以前、「孝」に特化した研究・評論はなく、阮朝以降それが現われてくるが、数量は少ない。ただし、本稿は『書目』にもとづき考察したため、2008年から現在（2013年）まで、詳細な状況を考察することはできなかった。しかし、儒教に関する研究資料、修士論文、博士論文の件数は増えているように思われる。筆者は儒教研究の資料がもっとも多く掲載されている *Tap chí triết học*（『哲学雑誌』）、*Tap chí Hán Nôm*（『漢喃雑誌』）の2008年から2013年3月までの目録を調べてみたが、『家訓歌』から見た「孝」、「歴代の視点から見たベトナムの「孝道」』という研究が掲載されている。さらに、漢喃研究院、ベトナム国家図書館、ホーチミン市総合科学図書館、ベトナム社会科学情報院で資料調査をしたが、「二十四孝」説話を漢字・字喃の文献および現代ベトナム語に訳した文献、「孝」を含めたベトナム人の道徳の研究書も所蔵されている。ただし、ベトナムにおける「二十四孝」あるいは「二十四孝」説話を文献学的に調査し、

15) Phan Đại Doãn, *Một số vấn đề nho giáo Việt Nam* 『ベトナム儒教のいくつかの問題点』（Chính trị quốc gia Hà Nội 出版社、1998年）、68～72頁。

これを詳しく分析した研究はないようである。

本稿ではまた、ベトナムにおいて儒教研究論文を掲載する学術誌としてどのような雑誌が刊行されているのかを紹介したが、これらはベトナムの儒教に関心を持つ外国の研究者に対して、新しい情報を提供するものとなろう。

19世紀と比べると、ベトナムにおける儒教思想の影響は少しずつ希薄になっているものの、「奉親」、「養親」という観念は現代のベトナム人の考えにはっきりと潜在している。しかし、現在のベトナム社会は、個人主義を重視する西洋文化や市場経済の影響を受けているため、「孝」および「孝悌」の思想や実態には多少の変化が見られる。このような社会背景の下において、「孝悌」に関する研究や「孝」教育を提唱するのは一定の意味があるであろう。『論語』学而篇に「其為人也孝弟、而好犯上者鮮矣。不好犯上、而好犯上而好作乱者末之有也」といい、『勸孝書』にも「孝者百行之原」、「孝為百行之根本」、『大戴礼記』曾子大孝篇にも「夫仁者、仁此者也。義者、宜此者也。忠者、忠此者也。信者、信此者也。礼者、体此者也。行者、行此者也。強者、強此者也」とあるように、「孝」の教育はなお、家族と国家にとって誠実でよい人材を生み出すことに寄与しうると思われるのである。